

2 カリキュラム作りのプロセスとポイント

学校の現状、未来像から 教育方針を共有化する

来年度から新学習指導要領の移行措置期間に入り、'02年度からは完全週5日制が導入される。直面する課題は、完全週5日制対応のカリキュラムをどう作るかだが、新課程を学校改革の要と考えている高校では、早い時期から新課程のカリキュラム作りが実施されている。今回は新カリキュラム作りに取り組んでいる二つの高校についてその考え方、具体的な作り方を紹介する。

6割以上の高校が カリキュラム検討を 今年度中に着手

ベネッセ文教総研が4月に実施した全国の高校へのアンケート調査(回答・

558校)によると、新課程のカリキュラム作りについて、「まだ先なので今年度は検討しない」高校が23・5%に対して、「素案が既にできている」と「検討を開始しようとしている」高校は合わせて68・3%。同様に「総合的な学習の時間」については「まだ先なので今年度は検討しない」高校が27・8%に対し、「素案が既にできている」「検討を開始しようとしている」高校は合計59・5%になる。6割から7割の高校は、新課程のカリキュラム作りへ早めの対応の必要性を認め、そのための一歩を既に踏み出したが、踏み出そうとしていることが分かる。

また、完全週5日制、新課程移行に関連して、1コマ当たりの授業時間の

変更については「現行と同じ時間」という高校が9割近くを占めるが、50分授業からの変更を考えている高校も、65分が19校、45分が9校、55分、60分、70分がそれぞれ3校あった。学期制の変更については「現行と同じ」が85・1%と高い一方、「3学期制から2学期制へ」も74校ある。現状では授業時間、学期制については現行通りと考えている高校が多いものの、変更を視野に入れている所もあり、選択の幅の広がりを感じさせる。

では、各都道府県の教育委員会は、完全週5日制や新課程に関連する問題についてどう考えているのか。ベネッセ文教総研が7月に行ったヒアリング調査(回答・19都道府県教育委員会)

によると、45分授業の取り扱いについては、「0・9単位として認める」「1単位として認める」「39週で1単位とする」「検討中」など、回答はまちまち。'02年度以降の週当たりの授業時数(標準30単位)についても、「未定」が多いものの、「30単位を厳守させる」「プラス2までは容認する」「制限を設けない」など方針には幅がある。

教育委員会でも、新指導要領における学校の自由裁量の主旨を踏まえつつ、地域や学校の状況に合わせて対応を決めようとしているようだ。各高校も「学校の指導理念」を再定義し、カリキュラム編成を通じた学校の特徴作りを早めに打ち出していくことが求められていると言えよう。

実践例 大阪府立天王寺高校 教師、生徒の意見を 取り入れながら、バランスのよい カリキュラムを目指す

普通科836名+理数科240名
6割以上が国公立大に進学

「委員会では、単に記念行事を行うだけではなく、もっと広く天王寺高校の在り方を考えていこう」と、とどんどん議論が展開していきました

準備委員会に発足時から参加している戸田徹先生はこう語る。その結果、「百周年準備委員会」は'92年には、100周年行事にテーマを絞った「百周年記念事業委員会」と、天王寺高校の将来を考える「将来構想委員会」の二つに発展的に分かれた。「百周年記念事業委員会」は会館建設、記念誌発行、記念行事、高校生国際交流(現在は海外派遣事業へ発展)など当初の事業を終え、「96年に解散」。「将来構想委員会」の方は、その後数々の課題に取り組み、現在に至っている。

「高校として何か新しい取り組みをしなければいけない」という気運が高ま

った背景には、生徒の変化を敏感に感じた教師集団の危機感があります。この頃から生徒の成績がバラつき出して、以前のように画一的な指導が困難になってきました。また、私立の中学や高校に生徒が流れる傾向も出てきました

「将来構想委員会」は、各分掌の代表で構成される学校運営委員会の互選による3名に、公選による3名の教師と、校長、教頭の計8名で構成され、週1回、時間割の中に時間を作り会議を開いた。放課後ではできるだけ生徒指導のために取っておこうという考えによる。

委員会は自発的な改革推進の母体とされたが、管理職との緩衝剤としての役目や、委員会という制度を作ることで教師全体の意識を高め一つにする、というねらいもあった。

将来構想委員会で、 学校の改革を推進

天王寺高校は現在、学校改革を進めているが、その直接のきっかけは新課程対応ではなく、'96年に迎えた創立100周年にあった。100周年を迎える高校は大阪府で5番目、大阪市内では2番目という大きな節目。それを機に「何か新しい取り組みをしよう」という気運が盛り上がり、'89年に「百周年準備委員会」が作られた。



天王寺高校進路指導部長
戸田 徹

将来構想委員会発足以
来の委員、数学科担当、
「授業時間数減少の中
で、新しい生徒指導の
在り方を考えた」

「学校というのは割と保守的な所で、例年通りのことをやっていければそれで済んでしまふ風潮があります。委員会は改革推進の場であると共に、新しいことをやるぞ」という意思表示のシンボルでもあるんです

委員会の会議では、まず検討課題を出し合うことから始めた。実現できるかどうかはひとまず置いて、思い付いたアイデアを並べていき、その中から取り組むべきものを拾い上げていった。その結果、検討課題として浮かび上がったのは、新学科設立、2期制、勉強合宿、習熟度別編成授業、週5日制対応、新課程対応、中学校への広報活動などである。

新学科設立は、課題の中で一番最初('93年度)に理数科として実現した。

「天王寺高校はもともと理系の生徒が多かったので、府下全域から理系の優秀な生徒を戦略的に集め、今までのノウハウを生かして教育し、世に送り出す」というねらいがありました」と、自身も数学を教える戸田先生はこう語る。

2期制へは'94年度に移行。将来の完全週5日制をにらんで、授業時間の確保と行事の配置時期の見直しが進められていたことが大きな理由だった。

「将来的には単位の半期認定も考えています。3年次の前期の段階で卒業単位を取得してしまえば、後期は自由選択的なものに使ってもできます」

習熟度別編成授業については、1年次数学において今年度後期より実施している。

教科バランスの維持を45分×7限で実現

「将来構想委員会」の活動は近年、新課程への対応にウエートを移しつつある。高校の未来像は、新課程抜きには考えられないからだ。

天王寺高校の指導の伝統的な特色として、「手をかけ、鍛えて送り出す」「行事・部活動など多彩な内容」などがある。

「本校では夏期講習などの課外授業をかなり前から実施していません。『手をかけ、鍛えて送り出す』とは、授業の中で十分な指導をするということ。授業内容を厳しくして、授業が理解できれば大学入試に対応できる力を保証するということです。具体的には予習の必要な授業をする、宿題をきっちり出すなど、毎日の地道な作業を継続させることです」

また、天王寺高校では部活動を奨励

し、芸術の授業にも積極的に取り組ませるなど、全人教育が伝統的に尊重されている。そのため、ある特定の教科だけを重視するといったことをしていない。その特色は現行カリキュラムにも表れている。

「非常にバランスのよいカリキュラム構成になっています。ある教科の比重がバランス上、大き過ぎるとか小さ過ぎるといことがなく、ある意味できれいなカリキュラムです。また、見たい目のバランスのよさだけではなく、例えば毎週金曜日には英語のテストがありますので、他の教科の教師は金曜日提出の課題を出さないなど、カリキュラム上は見えない点についても、お互いに工夫してバランスを取り合いながら教科指導を進めています」

新課程の学習指導要領案で「特色ある教育」が打ち出されたことに加え、生徒の成績がバラつき出した、私立の中学や高校に生徒が流れ始めたといった天王寺高校が抱える事情にも突き動かされて、「天王寺高校の特色化の総仕上げ」が今、迫られている。では「手をかけ、鍛えて送り出す」という特色をどう新課程に反映させるのか。

「天王寺高校は特色ある教育を行ってきたということが見えるカリキュラム編成にする必要があると考えました。

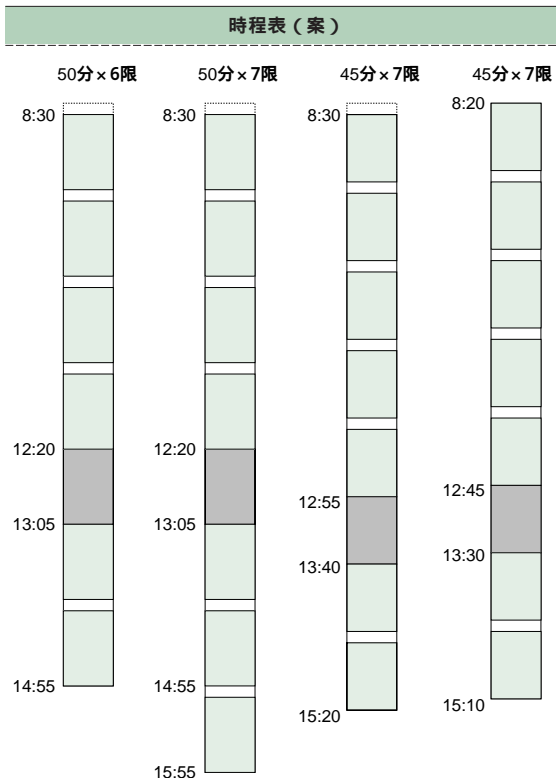
アンケートの数字に、新設される「総合的な学習の時間」と「情報」の単位数を加えると、各学年に必要な単位数は35単位から39単位になる。結局、天王寺高校の特色を打ち出すには、新課程が打ち出した30単位では難しいことが予想されることとなった。

「新課程は学校の特色化など評価すべき点もありますが、単位数が減るという大きな問題もあります。限られた時間の中でどのような教育活動を展開するのかを十分考えないと、今まで本校がやってきたバランスが崩れる危険があります」

そのバランスを維持し、かつ完全週

5日制をにらんで浮上したが、現行50分×6限を45分×7限にする案。完全週5日制になった時点で45分×7限(35コマ)に移行すれば、授業のコマ数が増えないので、それ以前とほとんど同じカリキュラムで済み、しかも移行期間の調整を考える必要がない。

「将来構想委員会」では、他に50分×7限などを含めた案を職員会議で提示している。どの案を採用するか、正式決定はこれからだが、現行より朝の授業開始時刻を10分早めた45分×7限の案が、委員会内では有力視されている。天王寺高校の特色の一つである、活発な部活動の時間を確保するためにも、



は現行時程は50分×7限、は45分×7限で、では朝の授業開始時刻が10分早。授業コマ数を確保しつつ、部活動を重視する点から、が有力視されている。

新教育課程において履修すべき科目と単位数についてのアンケート結果(普通科)

教科	1年	2年	3年		合計	
			文系	理系	文	理
					文	理
国語	現国 古典	現国 古典	現国 古典	現国 古典	18(18)	16(14)
地歴 公民	政経	倫理 世界史 日本史 地理	日本史 世界史 地理 現社	日本史 世界史 地理 現社	13(14)	11(12)
数学	数学 数学A	数学 数学B	数学B 数学演習	数学 数学C	18(18) 16(16)	19(19)
理科	理科総合A 理科総合B	化学 物理 生物	化学 生物	化学 物理 生物	13(12)	18(18)
保健 体育	体育 保健	体育 保健	体育	体育	11(11)	11(11)
芸術	音楽 美術 工芸 書道	音楽 美術 工芸 書道	音楽 美術 工芸 書道	音楽 美術 工芸 書道	6(6) 4(4)	6(4) 4(4)
英語	英語 OC	英語 英語W	Reading Writing	Reading Writing	18(18)	17(17)
家庭	家庭総合	家庭総合			4(4)	4(4)
小計	32	36	31	32 34	99	100 102
情報 総合					3	3
HR					3(3)	3(3)
合計	35	39	36	35 37	108(102)	109 111

合計欄の()は現行課程での代表的な選択の場合の単位数。

それには各教科の一律削減的な発想では解決できないものがあるはずだ。

そこで、「将来構想委員会」は、昨年度より機会あることに新課程の情報を提供してきたが、今年5月、各教科団に「新課程の下で各学年において履修すべき科目と、それに必要な単位数」についてアンケートを実施した。

在の単位数と変わらない数字が返ってきた。(右表)

「ある意味で予想された数字でした。手をかけ、鍛えるためには現在の授業時間数が必要と先生方は考えているのでしよう。また、新課程の教科内容を詳細に把握できていない段階では現行程度の単位数を確保したい、という気持ちもあつたかも知れません」

早い授業の開始が求められるからだ。

生徒による
授業評価を実施

授業を45分にした場合、減った5分をどうカバーするかはこれからの課題だが、授業の質的向上が求められるのは間違いない。新学習指導要領でも「教」から「学び」へ、「量」から「質」へと授業の質的転換が謳われている。

「将来構想委員会」では一昨年度から、卒業時に生徒に各教科の授業内容などについてのアンケートを実施している。

「いろいろな改革を行ってきましたが、さらに将来どういった改善が必要かを考えるには、生徒に3年間を総括してもらったことが必要だと考えました。以前から学習と進路について、各学年2回ずつアンケートを取っていましたが、3年最後のアンケートがなかったため、最後に3年間のまとめをしてもらおうと。卒業時なら教師に気兼ねすることもなく、本音で書いてくれるだろうという思惑もありました」

実施はまだ2回だが、アンケートの結果は、授業の実態を如実に反映するものとなった。また、昨年度卒業生と一昨年度卒業生の学年の特性もよく表れるものになったと言った。

「一昨年度卒業の学年は成績の幅が広がったため、何とか全体的なレベルを上げようと攻めの姿勢で生徒に接した結果、アンケートでは各教科について、授業のレベルが高いと思う」と答えた生徒が過半数を超える教科もありました。一方、昨年度卒業の学年は成績の分布も奇麗で、あまり手がかからなかつた学年からか、どの教科も「レベルは普通と思う」が6割から9割を占めました。指導の厳しさの違いがアンケートに出たように思います」

普段授業を受けているときは「優しい先生、楽しい授業がよい」という観点で見ているように思えても、卒業する段階では3年間でどれだけのことが身に付いたかをきちんと考えて評価していると言った。

「その点があつたり出た点ではよいアンケートだったと自負しています。これを5年間くらい続けると学年の特性の補正もできるでしょう。新課程に移行した後の授業の質的転換を検証することもできるでしょう」

アンケートの結果を授業の質的向上にどう生かすが、今後の課題だと言った。

「とりあえずは生徒による授業評価を始めたということに意義があると思つています」

「ビルドアッププラン」を通して 生徒自身、教師自身が 変わる。

基礎・基本の内容を 科目ごとに洗い出す

鹿本高校は、SⅠ(スクール・アイデンティティー)から新課程のカリキュラム作りを模索している高校の一つ



鹿本高校1学年副主任
西泰弘

「総合的な学習の時間」の研究開発委員会委員長。生物担当。新課程は教師にとって転換の時期と捉えています。



鹿本高校進路指導係副主任
竹下圭一

教育改革委員会委員長。国語担当。どんな学校にしたいのかという理念を基にカリキュラム作りに取り組むべきです。

だ。そして同校は'02年度の完全週5日制実施から'03年度の新課程導入以降の教育現場の変化を先取りし、一連の学校改革を「ビルドアッププラン」と名付けた。学校改革のきっかけは、「総合的な学習の時間」(以下「総合」)の検討にあった。

「昨秋に校長から『総合』についての研究をしてみないか、と話がありました。新課程の目玉となる『総合』は単に時間割のコマとして考えるのでは不十分だから、学校の理念作りから始めてみないかと(『総合』の研究開発委員会委員長・西泰弘先生)」

それを受けて「教育改革委員会」が結成され、校長、教頭、事務長に、当時教務主任だった黒瀬先生、生徒指導主事だった星子先生、さらに西先生と竹下先生が委員となった。分科会として

「総合」の研究開発委員会」の他、「授業創造小委員会」「課外活動・行事改革小委員会」「自宅学習改革小委員会」が作られ、全職員がこのいずれかに所属した。委員会がこの四つになったのは、生徒の1日24時間の活動を鹿本高校では知育、徳育、健康、体育の観点別にゾーン化し、各ゾーンに対応する上記三つの委員会を作った。それに「総合」に関する委員会を加えたためだ。

SⅠは、昨年10月から延べ1000時間以上議論を重ねられ、「生きる力」「自己を構築する力」「豊かな人間性」「オープンであること」などが打ち出された。「言葉を変えれば、生徒が将来どういう道に進むにせよ、人生を自分で作り上げる力を付けて欲しいということ」です。それには様々な教育活動が必要で、進路学習も欠かせませんし、学

習の面で見れば、各教科の基礎・基本を身に付けさせるということでも(教育改革委員会委員長・竹下圭一先生)基礎・基本については「この科目はここまででは理解して欲しい、ここまででは表現できるようになって欲しい」という具体的な到達目標(鹿本高校では「鹿高ゲインライン」と名付けた)を現在各科目ごとに作りつつある。その骨格となるのは学習指導要領だが、当然それを書き写しただけではない。

「基礎・基本の自身は高校ごとに異なるはず。鹿本高校生にふさわしい基礎・基本の姿があるはず。ゲインラインを基に鹿本高校ならではのテキストを作ってもいい、と。それくらいの志で進めています(竹下先生)」

新課程に対応し 土曜日の授業なし

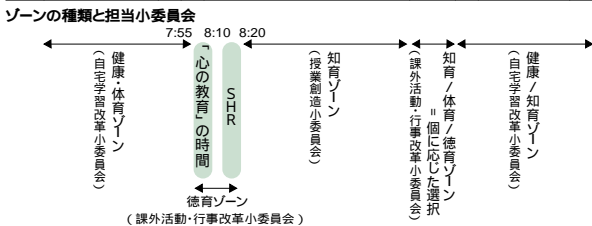
「教育改革委員会」の中心的課題の一つがカリキュラムの改革。当然、長い目で見れば、新課程導入をにらんだものとならざるを得ない。

今年度、鹿本高校は早くも改革に着手した。平日50分×6限の授業を50分×7限とし、代わりに隔週土曜日の授業

を一切なくして基礎・基本の確実な定着を図るためのテストの時間とした。「オール7限は大変でしょう」と言われますが、委員会でずいぶん議論をしましたが、職員会議で得た結論です。鹿本高校は以前から朝の補習など、全員参加の課外補習によって一定の成果を上げていました。しかし『課外補習で生徒を締め付けるより、本来の授業の中で力を付けさせるべきだ』という声がありました。それで、委員会の中で、年間どのく

鹿本高校生の1日24時間の活動を知育、徳育、健康、体育の観点からゾーン分けし、それに見合う「授業創造小委員会」「課外活動・行事改革小委員会」「自宅学習改革小委員会」を作った。さらに「総合的な学習の時間」の研究開発委員会を加えて「ビルドアッププラン」を提唱した。

時刻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
行動		睡眠				起床・朝食	登校		授業等									課外活動等	下校・夕食		家庭学習			就寝



らしいの授業や課外補習をしていたが、生徒はどのくらい力を付けていたかを数値的に検証しました。課外補習をなくして生徒に今までの力、それ以上の力を付けさせるにはどうすべきかを検討して出てきたのが、オール7限であり、ゲインラインなのです(西先生)ただし、ゲインラインなどに照らして学習内容を精選し、それが軌道に乗った段階で教科単位数の削減や、6限へ戻していく手順を踏んでいく。

「7限は現行課程から新課程への移行期間の苦肉の策です(西先生)」一方、隔週土曜日をテストにしたねらいは、授業で基礎・基本が身に付いたかを確認すると共に、定着しにくい基礎・基本を発見することにある。そのため、テストの名前も、「到達度テスト」とした。このテストで到達目標に達していない生徒には、翌週の火曜日から金曜まで放課後の「補習」を受けさせて、到達目標に達してもらった。そしてもう一つのねらいは、来年度入学の生徒が3年次に導入される完全週5日制をにらんで、週5日制カリキュラムへの移行をスムーズにするにある。

「週5日制を含めた新課程のカリキュラムについての詰めはこれからやる予定で、あまり焦っていません。焦らなくてもいい理由は、この土曜日の仕掛けにあります(竹下先生)」また、現在の1コマ50分の授業については「弾力的な運用が可能になる新課程からは『総合』のことも考えようと、授業時間の分割や拡大が柔軟に行える時間割、いわゆるモジュール・スケジューリングの活用が課題となります。それと合わせて特色ある学校作りの観点からも『学校設定科目』の導入を積極的に考えていきたいです」と西先生。「これからはますます個に応じた教育が求められますが、それには受け皿が多い方がいい。『学校設定科目』で進路学習や学力補強など様々な内容を設定し、生徒には好きなものを選択させるバイキング式の設定時間ということも考えられます(西先生)」

現代社会の課題(1年1学期より抜粋)	学期の目標	各教材の目標	使用教材	領域の大目標	領域の中目標	個別の到達目標
						到達すべき行動目標
現代社会・人生・世界の中での自分の位置を確認する 民主政治の基本原則を学習する	現代社会の特質	現代社会の特質・現代社会とわたしたち	現代社会の特質・現代社会とわたしたち	高校生活の意義を幅広い観点から学習し、自分自身の生き方を考える	現代社会の特質を学び、今後の自分の生き方を考える	産業社会・大衆社会・情報化社会・高齢社会・国際社会の特徴が理解できる。現代社会における自分の位置を確認できる。ノートの取り方を身に付ける。時事的な問題への関心を持つことができる。
		青年期の意義と課題	青年期の意義と課題	青年期について学び、現在の自分の生き方を考える	青年期の心理の特徴を理解できる。防衛反応について理解できる。社会化と個性化のバランスについて理解できる。	青年期の心理の特徴を理解できる。防衛反応について理解できる。社会化と個性化のバランスについて理解できる。